The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

印度學佛教學研究第六十一巻第一号　平成二十四年十二月

親鸞の仏弟子観
――金剛心の行人――

青柳英司

一　問題の所在

信を獲て仏道に立つということは、いかなる内実を有するのであろうか。親鸞はその主著である『顕浄土真実教行証文類』の「信巻」において、この獲信の主体を真仏弟子という言葉で、以下のように示している。

真仏弟子と言うは、真の言は偽に対し、仮に対するなり。弟子は釈迦諸仏の弟子なり。金剛心の行人なり。斯の信行に由って、必ず大涅槃を超証すべきが故に、真仏弟子と曰う。

（『定本』一四四頁）

ここで真仏弟子は、「金剛心の行人」という言葉で押さえ直されている。すなわち親鸞は、真仏弟子が獲る信を「金剛心」として確かめ、さらにこの心を獲得した主体を「行人」という言葉で示しているのである。よって拙稿では、この「金剛心の行人」という言葉を手掛かりに、親鸞が見出した獲信の内実について考察してみたい。

二　金剛心の意義

信心を金剛として示す意味は、どこにあるのだろうか。「信巻」では金剛という形容で以て信心を表す例が、随所に見られる。たとえば『往生要集』の引文では、以下のように述べられている。

譬えば金剛は百千劫において水中に処して爛壊し、また異変無きが如し。菩提の心もまた是の如し。無量劫において生死の中、諸の煩悩業に処するに、断滅すること能わず、また損減無しと。

（『定本』一一四頁）

ここで「金剛」は、菩提心の譬喩として用いられている。「生死」「煩悩業」の中という凡夫の生存の現実において、なお仏果に向かわせ続けるはたらきを、真実信心の質として明かそうとしているのである。

そして金剛心の問題が最も端的に示されるのが、三心一心問答の欲生釈である。ここで親鸞は善導の回向発願心釈を引

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

いた後、

真に知りぬ。二河の譬喩の中に、白道四五寸と言うは、白道は、白の言は黒に対するなり。白は即ち是、選択摂取の白業、往相回向の浄業なり。黒は即ち是、無明煩悩の黒業、二乗人天の雑善なり。道の言は、路に対せるなり。道は、即ち是本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり。路は即ち是、二乗三乗万善諸行の小路なり。四五寸と言うは、衆生の四大五陰に喩うるなり。能生清浄願心と言うは、金剛の真心を獲得するなり。本願力回向の大信心海なるが故に、破壊すべからず。これを金剛の如しと喩うるなり。

（『定本』一三〇―一三一頁）

と述べている。この箇所は無論、善導の二河譬を受けたものだが、しかし内容はその追釈に留まらない。むしろ教相判釈に近いもののように思う。すなわち、黒に対し路に対するということを通して、「大般涅槃無上の大道」たる浄土真宗を明らかにしようとしているのである。そしてこの仏道に立つ起点として語られるのが、金剛心である。

ではなぜ、金剛心において衆生は「大般涅槃無上の大道」に立ち、しかも「生死」「煩悩業」の中において退転することがないのだろうか。

この根拠を親鸞は欲生釈の最後に、「又云わく、金剛と言うは、即ち是無漏の体なり」[1]という一文によって示している。金剛心は有漏を体としたものではないのである。それは有漏の衆生に根拠を置かない如来の心であり、その故に有漏の衆生を、どこまでも仏道に向かわせるのである。このように「金剛」は、仏道を歩むその実際において問題とされるのである。では金剛心に支えられた仏道の歩みとは、いかなる内実を有するのだろうか。この問題を次に考えてみたい。

三　金剛心のはたらき

ここでは真仏弟子釈に引かれる、『安楽集』の文に注目したい。これは真仏弟子釈の中で最も大部な引文であり、また親鸞の様々な工夫が見られる。まずこの文は、「信巻」では一連の引文のように見えるが、実際は『安楽集』全体から広く集められたもので、原文の文脈では互いに脈絡があるわけではない。にも関わらず親鸞は、これらの諸引文を乃至だけで繋ぎ、あたかも一つの文であるかのように見せ、しかも次第にも一部変更を加えているのである。

つまり親鸞は、このような工夫によって「金剛心の行人」の実相を浮き彫りにしようとしているのである。よって以下、その内容を見ていきたい。まず『大集経』の文が引かれる。

説法の者においては、医王の想を作せ。抜苦の想を作せ。所説の法をば、甘露の想を作せ。醍醐の想を作せ。夫れ聴法の者をば、増長勝解の想を作せ。愈病の想を作せ。若しよくかくの如き説者聴者は、皆仏法を紹隆するに堪えたり。常に仏前に現ぜんと。乃至

（『定本』一四五頁）

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

真仏弟子は法を聴き、法を説いて「仏法を紹隆する」存在であることが、初めに押さえられるのである。

では「醍醐」や「甘露」にたとえられる法とは何か。続く『涅槃経』の文ではそれが、念仏の法として示される。真仏弟子は念仏の法を受持する存在であり、そうであるから必然的に「行人」なのである。

このことを受けて次に、『大智度論』の文が引かれる。この文は真仏弟子が獲る「知恩報徳の益」[2]を明かすものと考えられる。つまり念仏を受持するところに実現する歩みを、親鸞は「知恩報徳」として示そうとしているのである。

では「知恩」とは何か。衆生は仏の回施する南無阿弥陀仏を領受することによって、生死の流転から脱するのである。つまり「ただ念仏」[3]と信じるということは、このような仏の恩を知るということなのである。また「報徳」は、何か一つの行為を指すのではない。如来招喚の勅命に応答し、念仏もうして仏道を歩むということが、そのまま「報徳」の意味を持つのである。次に、その仏道を歩むことの内実が確かめられる。

まず『大経』の文が引かれる。これは先に述べた、次第が変えられている文である。つまりこの『大経』と次の『大悲経』の文が、『安楽集』の引文の結論ということだろう。ここでは先の『大智度論』の言葉を受けて、「ただ念仏」と信ずるところに無上仏道が開け、二乗の障を離れて、無始生死の有輪を傾くことが示される。仏の出世の本意とは、一切衆生を仏果に向かわせることである。そうであるから、そのような仏の願いに応答すること無しに、「報徳」は有り得ないのである。ただ親鸞はこれに続けて、さらに『大悲経』を引いている。

> 云何が名けて大悲とする。若し専ら念仏相続して断えざれば、その命終に随いて定んで安楽に生ぜん。若しよく展転して相勧めて念仏を行ぜしむる者は、此れ等を悉く、大悲を行ずる人と名づくと。
>
> （『定本』一四七頁）

すなわち「相勧めて念仏を行ぜしむる」という点に、親鸞は「報徳」の具体性を見ているのである。つまり真仏弟子は念仏を占有する存在ではなく、教化の志願を有する存在だということである。

しかしそれは、人師になることを意味するものではない。真仏弟子はどこまでも、弟子の分限を守る存在である。それはすなわち、教化の結実を私有しないということである。

真仏弟子と言っても、それは仏でも聖者でもない。身は凡夫である。自力無効の自覚に立ち、「ただ念仏」と信ずる背景には如来の願心があるのである。すなわち真仏弟子の歩みとは、全て如来に支えられたものなのである。

そうであるから教化の結実をどこまでも大悲にかえし、自

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

身は「弟子一人ももたず」[4]という分限を守るのである。そこにおいて真仏弟子は師と弟子という差別を超え、「普共諸衆生」[5]という平等が実現するのであり、真に「大悲を行ずる人」であると言えるのではないだろうか。すなわち「金剛心の行人」という言葉は、単に念仏者というだけの意味ではない。「大悲を行ずる人」という意味を、含意することになるのである。

四　結びにかえて

真仏弟子の歩みというものは、自身の現実の信知を基点としたものである。それは自力無功を知ると同時に、そのような自己を「倦きこと無く」[6]照らす、本願に出遇うということである。ここに「罪悪生死の凡夫」である衆生は、その現実はそのままに「金剛心の行人」として仏道に立つのである。

そして親鸞は、そこに実現する衆生の歩みまでをも、本願に立ち返って確認していった。衆生の側にはあくまでも、知恩報徳の心しかない。しかしその心に立つということは、仏果へ向かう歩みから退転せず、衆生済度の事業に参入する者となるのである。すなわち親鸞は、如来のはたらきによって自利利他の課題が満足される者のことを、「真仏弟子」・「金剛心の行人」という言葉を通して、明らかにしているのである。

1　『定本』一三二頁。
2　『定本』一三九頁。
3　『定親全』四・言行篇一・五頁。
4　『定親全』四・言行篇一・五頁。
5　『真全』一・二七〇頁。
6　『定本』一一四頁。

【凡例】

一、原漢文のものは筆者が『真宗聖典』（一九七八年、東本願寺出版部）を参考に書き下し、読み易いよう適宜整文した。また左訓は省略した。
一、旧漢字・旧仮名遣いは、原則として現行のものに改めた。
一、出典は、次のように略記した。
『定本教行信証』（法蔵館、一九八九年）→『定本』
『真宗聖教全書』一（大八木興文堂、一九四一年）→『真聖全』
『定本親鸞聖人全集』（法蔵館、一九六九年）→『定親全』

〈キーワード〉　浄土真宗、親鸞、「信巻」、真仏弟子、金剛心

（大谷大学大学院）

NII-Electronic Library Service